

<追悼文> 加藤林太郎先生の思い出

著者	東浦 弘樹
雑誌名	年報・フランス研究 = Bulletin Annuel d'Etudes Francaises
号	55
ページ	117-124
発行年	2021-12-25
URL	http://hdl.handle.net/10236/00030084

[追悼文]

加藤林太郎先生の思い出

とう 浦 弘 樹

関西学院大学文学部名誉教授（フランス文学）の加藤林太郎先生は、2021年8月24日、脳梗塞で逝去された。享年87であった。

加藤先生は私にとって恩師であり、仲人であり前任者でもある。私は大した人間ではないが、それでも私の今日あるのは加藤先生のおかげである。

先生と最初にお会いしたのは、私が京都大学を卒業して聴講生をしていたときだから、1981年ということになろうか。大学院進学を考え浪人していた私は、関西学院の大学院への進学を視野に入れており、人を介して加藤先生を紹介してもらい、京大近くの東一条の喫茶店でお話を伺った。

翌1982年4月、私は関学の修士課程に入学し、当然のごとく加藤先生の指導下に入ったが、その前に少しトラブルがあった。私は中学までは地元・尼崎の公立校に通ったが、高校は関西学院高等部へ行った。深い考えがあって行ったわけではない。近くの高校で当時の私の学力に見合うところが関学高等部だけだったからだ。高等部の生徒はそのほとんどが面接のみで関西学院大学に進学する。外部の大学を受験する生徒は極めて稀である。ところが、私はそんなことさえ知らなかった。だから当然、大学受験をするものだと思い、受験勉強をして京都大学文学部に合格し入学した。大学院入試の面接の際、そのことを問題視する面接員がいた。

その面接員曰く——「関西学院大学にも仏文科があるのに、あなたはどのようにその大学へ行ったのですか。それは関学仏文の先生方に対して失礼ではないですか。」「後ろ足で砂をかけるような形で出ていった人間が、今になって関学に入りたいというのはどういうことですか。」「仏文の先生方はみんなク

リスタンだから、放蕩息子の帰還と言って喜ばれるかもしれませんが……」。

ひどい教員もいたものだ。関学の名誉のために言っておくと、この頃も今もこんな教員はまずいない。おそらくこの人物だけであろう。よりによってそういう教員に面接で当たってしまった私は不運だったとしか言いようがない。なお、当時の私にはわからなかったが、「仏文の先生方はみんなクリスチャンだ」というのは大嘘である。仏文には6人の専任教員がいるが、当時在職していた先生方——高塚洋太郎先生、田辺純夫先生、片山正樹先生、加藤林太郎先生、曾我祐典先生、中川努先生——の中にクリスチャンは一人もいなかった。

面接で受験生は弱い立場にある。私は「はい」、「はい」と言い、「わかりました。よろしくお願いします」と言わざるを得なかったが、内心は怒り狂っており、「あんなおかしな大学になど行くものか」と本気で入学辞退を考えた。そんな私を最終的になだめてくださったのは加藤先生であった。先生は「あの人は仏文の教員ではない。」「仏文の教員は誰一人そんなことは思っていない。」と仰ってくださったのである（本当はもっといろいろ仰ってくださったのだが、差し障りがあるといけないので、ここには書かない。ただ、先生が私の気持ちを理解し寄り添ってくださったことは確かである）。

関学の大学院に入学して驚いたのは、教員と学生、院生の距離が非常に近いことである。京大時代の私は教員と個人的に話をした経験は全くなく、仏文研究室に足を踏み入れたこともなかった。卒業論文も教授から一切指導を受けることなく、自分一人で書いた。しかし、関学では仏文研究室が教員、学生、院生の憩いと社交の場になっており、そこへいけば必ず誰かがいてコーヒーを淹れて話をすることができた。また、加藤先生はゼミ（確か木曜の4限だったと記憶している）終了後に、我々ゼミ生たちと一緒に仁川の方へ歩いて帰り、途中にある喫茶店「こんつえと」でよくお茶をご馳走してくださった。ありがたいことである。

さらにありがたかったのは、修士論文の指導に夙川のご自宅にまで呼んでくださったことである。修士論文の締め切りは1月中旬である。11月頃になるとかなり焦ってくる。私は先生のご自宅へ行って「先生、一行も書けません」

と泣きついた。後年、先生は「東浦君はすごいよ。うちに来て『一行も書けません』と言っておきながら、次に来た時には『書けました』と原稿を持ってくるんだから」とよく冗談を言っておられた。先生の言葉にはもちろんかなり誇張があるが、先生のお宅にお邪魔していろいろ話をしているうちに「そうか、こうすればいいんだ」と発見があり、おかげで修論に着手することができたのは事実である。

とはいえ、そこから完成までまだ道のりは遠い。私は大晦日に先生のご自宅に伺い原稿を読んでいただき、「ありがとうございます。それではよいお年を」と言って帰路についた。家に帰ると紅白歌合戦が終わっていた。大晦日のそんな時間まで先生は私の指導をしてくださっていたのだ。そしてさらに、1月3日には「あけましておめでとうございます」と言いながら先生のお宅に伺い、最終手直しを読んでいただいた。今にして思えば非常識なことをしたものである。

自分が教員になった今、私は先生に受けた恩を学生に返そうと思っているが、それでも学生や院生を自宅に呼んだことはない（学生、院生とは大抵、自宅近くの喫茶店で話をしている。最近は Zoom がそれに取って代わった）し、大晦日や三が日に会ったこともない。先生にも奥様にもずいぶんご迷惑をかけたのではないかと、感謝するとともに反省している。

私は1985年にフランス政府給費留学生としてフランス・アミアンのピカルディー大学（現ピカルディー・ジュール・ヴェルヌ大学）に留学したが、それもまた加藤先生のおかげである。フランス政府給費留学生の試験に合格し留学することは、フランス文学を志す若者にとって「名誉」であり「勲章」である。しかし、それだけにそう簡単に受かるものではない。加藤先生は若い頃にその「勲章」を手に入れ、パリに2年間留学なさった。当時はフランスまで飛行機で行くか、船で行くかを学生本人が選べたそう。先生は船を選択し、なんと1ヶ月もかけて渡仏なさったそうで、そのあたりの話も私はよく聞いていた。

ある時——私が修士課程の2年の時だったから1983年ということになる

か——先生が「私のゼミ生はこれから毎年必ずフランス政府給費留学生の試験を受けることにしよう」と言い出した。先生が本気でそうおっしゃったのかどうかはわからない。ただ、いたって素直であった私は「先生がそうおっしゃるなら」ということで、受験申し込みをした。試験当日、会場となっていた関西日仏学館（現アンスティテュ京都）へ行ったら教室を見渡すと、加藤ゼミの院生は私しかいない。素直に先生の言葉に従ったのは私だけだったのである。

この年はあえなく不合格となった。次の年も私は先生の言葉に従い試験を受けるつもりだった。ところが、怠惰な私のこと、書類を揃えるのが遅れてしまった。その間に京都大学は夏期休暇に入ってしまった、卒業証明書や成績証明書が手に入らない。「そういう事情なので今年は見送ろうと思います」と、私は先生に言った。「受けてもどうせ受からないのだから」とは言わなかったが、そういう気持ちも裏にはあった。

しかし、先生は「書類は後から送ればいい。とにかく受けてみる」とおっしゃった。私はいたって素直な人間なので、先生の言葉に従い事情を説明する手紙を添えて受験の申し込みをした。そして……なぜか合格した。

こうして留学が決まったものの、私はフランスに知る人もなく不安で仕方がない。加藤先生はパリの大学都市（Cité Universitaire）にある日本館に住んで随分と愉快的な留学生活を送られたようだが、私の行き先はアミアンのピカルデー大学——先生の経験は私には当てはまらない。そんな話を仏文研究室でして、一緒に帰ろうとぶらぶら正門のあたりまで来たとき、ある先生と偶然出会った。その時は誰だかわからなかったが、商学部でフランス語の教授をなさっていた中谷拓士^{ひろし}先生である。そのまま3人で正門前の喫茶店 TOP に入って少しおしゃべりをした。中谷先生はその翌年、大学からパリの大学に派遣されることになっていた。加藤先生は「それなら中谷君から連絡先を聞いておけばいい」とおっしゃった。これで私にはフランスにひとり知る人ができたわけである。

私は1985年秋にパリの北150キロのところにある小さな町アミアンに留学した。アミアンを選んだのは、そこに国際カミュ研究会（Société des Études

Camusiennes)の創立者であり会長でもあったジャクリヌ・レヴィ＝ヴァランシ先生がいたからである。アミアンからパリ北駅までは電車で1時間あまり(150キロを1時間あまりで走るということは、平均時速150キロ近くで走っていることになる。「え? TGVでもないのに、そんなに速いの?」と思わないではないが、実際そうなのだから仕方がない)で、決して速くはない。しかし、私はすぐには中谷先生に会いには行かなかった。一度お会いしただけの人物であり、私からすれば「先生」だ。会っても何を話せばいいかわからない。

それでも翌年3月に中谷先生に手紙を書いて(当時はまだLineやメールなどというものはなかった)パリでお会いすることになった。こう言っただけでは語弊があるが、仲介の労を取ってくださった加藤先生への義理立てである。中谷先生はパリ・モンパルナスの有名なカフェ「ドゥ・マゴ」を指定してこられた。ところが間の悪いことに、私はその日、メトロの駅の通路で通行人とぶつかりメガネを落として、片方のレンズを割ってしまった。私は「ど」がつく近眼である。メガネなしではいられないが、片方しかレンズの入っていないメガネでは危なくて仕方がない。やむを得ずレンズが割れた方の枠にティッシュペーパーで蓋をしてセロテープで止めて「ドゥ・マゴ」に向かった(ティッシュペーパーはともかく、私はどこでセロテープを手に入れたのだろう。さっぱり覚えていない)。

そんな姿で「ドゥ・マゴ」に現れた私を見て、中谷先生はさぞかしびっくりされたことだろう。その時は1時間か2時間お話をして別れたが、その数年後、私は中谷先生に言われて商学部のフランス語担当の専任講師に就任することとなる。加藤先生の推薦があったからだろうと推測するが、同時にあの時、私がああいう姿で現れたことが中谷先生に強い印象を与えたからではないかと、私は今でも思っている。

結局、私はアミアンの学生寮に2年、パリ郊外のステュディオに1年半、都合3年半フランスに滞在した。滞在を切り上げたのは、加藤先生から「今帰ってくるなら、非常勤の職くらいは用意できる」と言われたからだ。1989年、私は帰国して関学の文学部と甲南女子大学の非常勤講師となった。翌1990年

にはさらに関学商学部と神戸学院大学でも非常勤の仕事をもたらした。中谷先生から呼び出されて、商学部の専任講師にならないかと言われたのはその頃である。もちろん嫌なはずがない。1991年に私は商学部専任講師に就任した。もちろんこれは中谷先生のおかげであるが、さかのぼって考えれば、あの夏の日、中谷先生を紹介してくださった加藤先生のおかげでもあると言えよう。

私は1992年11月に結婚した。仲人はもちろん加藤先生ご夫妻にお願いした。1995年10月に息子が生まれた。あれはいつだったか、まだ幼い息子連れて夫婦で加藤先生のご自宅に伺ったことがある。先生はどこから手に入れたのだろう、自動車のおもちゃを出してきて息子と遊んでくださった。帰り際、なぜだか息子は先生の奥様の手を掴んで離さない。仕方がないので、奥様は夙川の駅まで一緒に来てくださった。

1998年、私は大学から半年間フランスに派遣された。とりあえずキッチン付きのアパート形式のホテルに部屋を取り、それからちゃんとしたアパートを探すことにした。パリで出版されている日本人向けのタウン誌OVNI（OVNIというのは、Objet Volant Non-Identifié「未確認飛行物体」の略称である）で地下鉄7番線のランラッグ駅近くに家族で住めるような家具付きアパートがあることを知り、早速部屋を見に行ったら。静かで環境のいいところである。アパートへ行くと部屋はもう借り手がいるということだったが、家主のマダムが「中を見るだけでも見てみますか？」と言うので見せてもらうことにした。人の良さそうなマダムで「この部屋には昔、日本の方が住んでいたんですよ。名前は……確かカトウ・キンタロウだったかしら」と言う。

カトウ・キンタロウ？

「キンタロウではなく、リントロウではありませんか」と尋ねても、「いや、キンタロウだった」とマダムは言う。私は加藤先生に手紙を書いて確かめた。案の定、そこは以前、加藤先生がご家族と一緒に住んでおられたアパートだった。

加藤先生を慕う人間は私だけではない。2002年3月に先生が関学文学部を定年退職なさって以来、年に2度、7月と3月に私と有志で先生を囲んでお昼にフランス料理屋で食事会を開いた。メンバーは、私より前に商学部から文学部に移籍なさった中谷先生、仏文の教授であった伊藤了子さん、関学仏文の大学院のOB、OGで同志社大学で教員をしている伊勢晃君、あちこちの大学で非常勤講師をしている谷口千賀子さん、阪口勝弘君である。特筆すべきは、伊勢君も谷口さんも阪口君も加藤先生のゼミ生ではなかったということだ。谷口さんに至っては、専門はフランス文学ではなく、フランス語学である。ゼミ生以外の学生がかくも長く、かくも深く先生を慕っていたということは、先生のお人柄を示すものであると言うべきだろう。

先生と最後に食事に行ったのは、先生のご自宅近くにあるル・ベナトンというフランス料理屋である。こう言うてはなんだが、先生の体が弱り、遠くまで行けなくなった時のためにとっておいたレストランである。

先生は車椅子で奥様とご一緒においでになった。お酒はあまり召し上らなかつたように思うが、料理は健啖に召し上がったと記憶している。

加藤先生逝去の報に接して、私は食事会のメンバーや、大学院の同期で現在は金沢美術工芸大学の教授をしている青柳りささんや、文学部の事務長に連絡を取ったが、仏文の他の教員たちに連絡を取るべきかどうか少し迷った。現在仏文にいる教員たちは関学出身ではなく、就任も私より後であるため、加藤先生のことを知らないからだ。だが、一応は知らせておくべきだと思ってメールを送った。するとフランス語学の教授である高垣由美さんから返信が届いた。

高垣さんは京都大学文学部の出身であるが、非常勤講師として京都大学に教えに行かれていた加藤先生の授業を受けたことがあるらしい。そのとき加藤先生はフロベールの『三つの物語』を3年かけて読むということをやさっていて、高垣さんは「聖ジュリアン伝」の前半を読み、1年間留学して、帰国後また先生の授業を受け、「エロディアス」の後半を読んだそうだ。

加藤先生は優雅で博識な人で、いかにも仏文学者という感じであった。文学

作品を読む楽しさを前面に出して教える教師は今も昔も決して多くないが、加藤先生はそういう先生であった。当時授業で使った書き込みがいっぱいの教科書はいまだに懐かしくて捨てられない——高垣さんはそう書いていた。

このメールに感動した私は、加藤先生のご自宅に伺った際、奥様にそのことを申し上げた。すると奥様は「高垣さんというお名前には覚えがあります」とおっしゃった。加藤先生はクラスの優秀な学生として高垣さんのことを覚えており、家で奥様にお話しになっていたのである。

加藤先生の薫陶は、ゼミ生として直接、先生に指導を受けた人間だけが受けたわけではない。先生の授業を受けた人間、先生と交わった全ての人間の中に生きていると言うべきだろう。

私は2002年に定年退職を迎えられた加藤先生の後任という形で文学部に移籍し教授になった。それから20年の年月が流れた。平凡な言い方かもしれないが、過ぎてしまえばあつという間だったような気がする。定年を5年後に控えた私はときどき考える——私は加藤先生からバトンをきちんと引き継ぐことができたのだろうか。加藤先生たちが作り上げた仏文のよき伝統を守り続けることができたのであろうか。とてもそうは思えない。申し訳ない気持ちでいっぱいである。

加藤先生、私は先生の不肖の弟子です。そして最後まで不肖の弟子のままでした。

でも、誰よりも先生に感謝しているつもりです。

どうぞ安らかにお眠りください。